

子豚が生まれてから すぐやるべきこと！

～ちょっとした工夫で生存率が向上する子豚のケア～

(有)豊浦獣医科クリニック 中村 高志

養豚は、種付がスタートでその後は引き算しかない産業です。そのマイナス要因の第1段階が種豚の管理、その次が分娩舎の管理となります。せっかく産ませた子豚もしっかりとした健康な子豚を離乳しなければ出荷頭数の確保はできません。

日本養豚開業獣医師協会（JASV）が動物衛生研究所と共同で取りまとめているPig Infoベンチマーキングの2012年までのデータを見ると、総産子数や生存産子数が良くなってきているにも関わらず、離乳頭数の伸びが良くない結果となっています。哺乳中の育成率が課題であることが分かってきました。哺乳中の子豚の死亡は生後1週齢以内が大半を占めており、デンマークではLP5（分娩後5日目での1腹当たりの生存子豚数）を育種改良指標の1つとすることで、現在の離乳頭数の向上につながってきています。ここでは、「ちょっと手をかける」ことによって子豚を助けてあげられる方法について考えてみたいと思います。まずは、哺乳豚の生理を知ることから始めてみましょう。

初乳を飲ませる

生まれてくる前の子豚、即ち胎子は母豚の子宮内で妊娠期間中すくすくと育てられます。とくに最後の1週間で急激に発育し、妊娠115日前後で娩出されます。

ご存じのように豚は、胎子の段階では母豚から免疫が与えられない胎盤構造のため、新生豚は初乳（免疫グロブリンを多く含んだ）を生後24～36時間以内に摂取することによって母豚の免疫をもらいます。この初乳を飲むことにより病原体から自分の身を守ることができます。また、免疫グロブリンを腸管から吸収できる時間も初生時の早い段階に限られるため、生まれてからすぐ子豚たちに均等に初乳を飲ませなければなりません。このために分割授乳（小さい子豚もしっかりと初乳を飲めるチャンスをつくる）が重要な作業となります。

寒さに弱い子豚

生まれたばかりの子豚は被毛が少なく皮下脂肪が薄いため、寒さに対して極めて弱い動物です。環境温度によって変わりますが、出生後から約1時間の間に子豚の体温は急激に低下するものの、母乳を飲むことによって徐々に回復していきます。生時体重が小さく・虚弱な子豚は、大きい子豚より体温の低下が大きく寒さによる損耗も激しいため、保温しないで長時間放置すると体温低下により死亡してしまいます。日齢が進んだ子豚でも腹冷えによって下痢を発症させてしまうこともあります。

分娩直後の子豚の適温域は34～35℃で、保温箱等による加温が必要です。保温箱内の温度は30℃程度が目安で、子豚が「餃子」のように寝ていればちょうどいい状態です。もし、重なり合って寝ていれば「寒い」という子豚たちのサインです。日齢が進み大きくなるに従い、1週間に2～3℃ずつ下げていくようにします。すき間風は子豚の体感温度を低下させる大きな要因となります。すき間風を防ぐ工夫が大切です。

哺乳豚の貧血

哺乳中の子豚は貧血を起こします。出生後すぐに起こるのが「生理的貧血」です。新生豚が初乳を飲み始めると血液が希釈されて赤血球が減少し貧血状態となります。次に、子豚は発育に対して造血機能が未熟です。ヘモグロビンの構成成分である鉄の要求量に比べ母乳中の鉄含量が少ないことから「鉄欠乏性貧血」となります。このために初生時の鉄剤の注射が必要になってきます。血色の悪い子豚がいたら、貧血が考えられます。

分娩前後の母豚

今まで、哺乳豚の生理についての主だったことに触れて

きましたが、分娩舎での結果は分娩舎だけの努力で出せるものではありません。母豚の妊娠期の給餌管理、ワクチンを含めた衛生管理や母豚の体調をベストコンディションにしておく飼養環境管理が根本にあります。今回のお話は分娩舎に的を絞っていますので、割愛させていただきます。前段階の管理も非常に重要であることを覚えておいてください。

ベストな状態で分娩舎に導入された母豚も、分娩時のトラブル（難産や産褥熱など）を起こしてしまえば、子豚たちが母豚からの栄養（母乳）を摂取できなくなってしまう。このような状態になると子豚は正常な発育もままならず、対応次第では死亡してしまうことにもなりかねません。母豚の健康状態や分娩時の状況を見ながらの適切な判断や処置がその後の哺乳豚の育成率に大きく影響します。母豚あつての哺乳豚なのです（写真1）。

分娩時のケア

企業的な養豚では、分娩時のケアも就業時間内、しかも作業の合間での分娩助助が主体となり、看護分娩を行っているところは少ないように感じます。以前とは条件が違いますが、数十年前までは分娩は一大イベントでした。分娩舎には仮眠もできる休憩室があり、看護分娩で1頭1頭生まれてきた子豚をワラや布きれで子豚を鳴かせながら拭き、へその緒をしぼってから、母豚の乳房をさすりながら子豚に初乳を飲ませていました。養豚農家の奥さんたちの活躍の場でもありました。最近の高能力母豚では、総産子数が多いのですが、死産数が増えたり、哺乳開始頭数が多くても哺乳中の事故が多くなってしまい、最終的な離乳頭数は以前と変わらずというケースが多く見られます。分娩回転率も頭打ちに近い状態の今、1頭でも多く助けるために分娩時の助助に比重をかける必要があります（写真2）。

子豚のケア

まずは、生まれた子豚の損耗（体温を奪われる）を防止するために濡れた体の乾燥です。ウエスで拭いたり、珪藻土などが含まれた環境衛生資材をまぶして濡れた体を早く乾かしてあげます（写真3）。そして、初乳をいち早く十分量飲ませてあげます。このときに小さな子豚にも十分な量を飲ませるために分割授乳を行います。子豚が母乳を飲めたか否かの確認方法は、哺乳豚の腹部を親指と人差し指でつまむように軽く押して確認します。母乳を飲んでいれば抵抗感がありますが、飲んでいない場合はそのまま指と指がくっつくくらい押せてしまいます。



写真1 このようにたくさんの元気な子豚を育てたいものです



写真2 分娩助助が必要！胎盤が絡まった死産子豚。その横には娩出されて震えている子豚が…



写真3 珪藻土を主成分とした環境衛生資材。価格が安く気軽に使える

また、小さな子豚や虚弱な子豚にはすぐに使えるエネルギー源として中鎖脂肪酸の経口投与が効果があることが分かっています。子豚の活力が増し、母乳を吸う力が強くなります。このように子豚の体温低下防止と初乳を飲ませることがスタートです。そのあとに分娩処置を行います。分娩処置時の器具・機材は衛生的な取り扱いをしてください（写真4）。このときに切歯、断尾、鉄剤注射、体重測定などを行います。母豚の嫌乳やスス病の問題がない農場では切歯を行わないようにしています。断尾については尾かじりの問題がありますので、適切な長さにテールカッターで



写真4 分娩処置の器具・機材は衛生的に

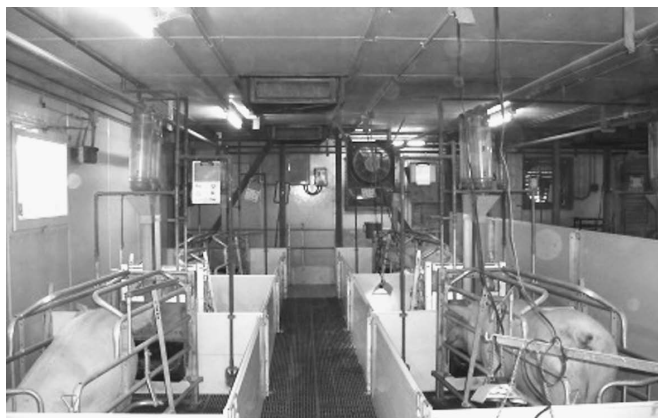


写真6 保温箱のないウインドウレス分娩舎。風の影響で子豚の損耗が多かった



写真5 子豚の観察と対応 上の写真は餃子状にきれいに寝ていますが、下の写真はヒーターの下から逃げて寝ています。子豚が気持ちよく寝られるようにしましょう

処置します。生時体重はその後の発育や育成率に影響する重要なファクターになります。母豚の給餌管理の目安として活用します。

ちょっとした工夫

工夫をする際に考えなければならないことは、単に作業性の向上が目的なのか、豚にとって必要なことなのかを見極めながらアイデアを出し、実践していくということです。冒頭で説明させていただいた哺乳豚の生理を頭に入れながら、豚に対する「おもてなし」を実践するということです。



写真7 試行錯誤の連続で、簡単な保温箱用に。
左：何もないとき、中：傘を置いた風対策、右：半木をベースにビニールをつけた、下：簡単に取り外しができます



写真8 分娩用の保温ランプの下に紙袋を置き、下からの風を防いだ工夫



写真9 分娩時の工夫。母豚の尻側にゴムマットとその上にオガクズを敷く



写真10 風よけ用にビニールをたらす



写真11 保温箱に天板をあと付けした

写真5～9は保温箱のない分娩舎での現場での試行錯誤の工夫例です。また、風除けのための農場ごとの対応例を写真10～11に示します。



子豚に対する生まれてからの対応について基本的なこと

について述べてきました。1頭でも多くの健康な子豚を離乳するために、農場の何が問題なのか、何を改善しなければならないのかを生産データや、実行してきたことの記録を基に分析し、対策を立て実践します。そのためには、豚を「観る（観察）」という基本に立ち返ることが大切ではないでしょうか。